

## 生態園における哺乳類相の変遷

下稲葉さやか<sup>1)</sup>・宮川尚子<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> 千葉県立中央博物館  
〒260-8682 千葉市中央区青葉町 955-2  
E-mail: shmnbc@chiba-muse.or.jp

<sup>2)</sup> 千葉県庁環境生活部文化振興課  
〒260-8667 千葉県千葉市中央区市場町 1-1  
E-mail: n\_miyakawa@chiba-muse.or.jp

(2024年1月29日投稿; 2024年2月4日修正; 2024年2月4日受理)

**要旨** 千葉県立中央博物館生態園(千葉市中央区青葉町)の哺乳類相は、これまでに1990年前後に実施された調査結果が報告されている。近年、中型の食肉目4種が新たに報告されたが、他の分類群も含めた全体的な現在の哺乳類相は不明である。そこで、現在の生態園内の哺乳類の生息状況を明らかにするため、2015年から2023年までの自動撮影カメラ調査の結果、目撃情報、フィールドサイン等の情報を整理した。その結果、4目8科8種が確認された。1990年前後の調査により報告された5目6科7種と比較すると、近年報告された1目4科4種が増加した一方で、3目3科3種(ニホンイタチ、ニホンノウサギ、アカネズミ)は確実な生息情報が得られなかった。

**キーワード**: 千葉県立中央博物館生態園, 哺乳類, 動物相。

千葉県立中央博物館生態園(以下、生態園)は、千葉市中央区青葉町の都市地域に島状に孤立した緑地である千葉県立青葉の森公園(以下、青葉の森公園)の中に位置する約6.6haの野外観察地である。園内には、房総の代表的な植生が再現された植物群落園や、コナラ、イヌシデ等からなる二次林があり、約1haのため池である舟田池もあるため、水辺の生き物を含め様々な野生生物が観察される。園内の哺乳類の生息状況に関しては、1988年から1992年に調査が行われ、5目6科7種の生息が確認されている(今関ほか, 1994)。その後、生態園の哺乳類に関するまとまった報告はされてこなかったが、2015年から2021年に行われた中型哺乳類を対象とした自動撮影カメラによる調査等により、今関ほか(1994)で報告されなかった食肉目4種(アナグマ *Meles anakuma*, アライグマ *Procyon lotor*, ハクビシン *Paguma larvata*, イエネコ *Felis catus*)が新たに報告され、生態園の哺乳類相が変化していることが示された(千葉県立中央博物館, 2020; 宮川・下稲葉, 2022)。

生態園は、土地を造成して千葉県の代表的な樹木の苗を植え、育ててきた場所が含まれ、整備の始まった1987年から約35年が経った現在は、これらの樹木が大きく成長したほか、海岸植生や草地が人工的に維持されている(由良, 2019)。このような生態園の植物群落の変化とともに、生態園を利用している哺乳類相も変化している可能性がある。さらに、千葉県立中央博物館(2020)や宮

川・下稲葉(2022)により新たな中型食肉目が報告されたことにより、これらの種が捕食するような小型哺乳類の生息状況が変化している可能性がある。そこで、本稿は、現在の生態園における全体的な哺乳類相を明らかにすることを目的として、2015年から2021年までの生態園の哺乳類相を報告した千葉県立中央博物館(2020)や宮川・下稲葉(2022)の情報を、その後の調査結果や追加情報を合わせてとりまとめ、今関ほか(1994)と比較することで生態園の哺乳類相の変化について考察する。

### 材料と方法

2015年12月から2022年3月にかけて、生態園を含む千葉県立中央博物館(以下、中央博物館)敷地内の10箇所に自動撮影カメラ(Scout Guard, TREL 10J-D, GISupply)を設置し、哺乳類の出現状況調査を行った。カメラの設置箇所を図1に、撮影期間を表1に示す。カメラ1は舟田池に架かる橋のたもと、カメラ2は木の洞の前、カメラ3は温室に隣接する草地のけもの道、カメラ4はビワの木の前、カメラ5は舟田池のほとり、カメラ6と7は舟田池に続くけもの道の前、カメラ8はオリエンテーションハウスの壁面、カメラ9はススキ草地、カメラ10は照葉樹林の中のけもの道の前に設置した。

2015年8月、園内にてアライグマの足跡が発見されたことを受け、アライグマの生息状況を把握するために、2015年12月から2016年4月にかけて、カメラ5を舟



図1. 生態園における自動撮影カメラの設置場所. 設置場所を☆印で示した.

表1. 生態園における自動撮影カメラの撮影期間と設置場所の特徴.

カメラ番号	撮影期間	設置場所の特徴
1	2020年7月～2021年3月※1	舟田池にかかる橋のたもと. 昼間は人通りが多い.
2	2021年12月～2022年1月	木の洞の前, 舟田池畔, 隣接する植生はヨシ草地, 常緑広葉樹林, 常緑針葉樹林.
3	2019年2月	温室に隣接する草地のけもの道.
4	2018年6月	結実したビワの樹木の前.
5	2015年12月～2016年4月	舟田池畔, 隣接する植生はヨシ草地, 常緑広葉樹林, 常緑針葉樹林.
6	2018年11月～2019年1月※2 2020年3月～2022年3月※1	舟田池畔, 隣接する植生はヨシ草地, 常緑広葉樹林, 常緑針葉樹林.
7	2020年8月～2022年3月※1	舟田池畔, 隣接する植生はヨシ草地, 常緑広葉樹林, 常緑針葉樹林.
8	2019年12月～2020年1月 2020年4月～2020年5月	オリエンテーションハウス前.
9	2022年2月～2022年3月	ススキ草地.
10	2020年5月～2022年3月※1	照葉樹林.

※1 2021年3月までのデータは宮川・下稲葉(2022)でも使用.

※2 千葉県立中央博物館(2020)にて使用.

田池のほとりのけもの道に設置した。2018年11月、舟田池の水位上昇や水草の繁茂によりカメラ5の地点にアクセスできなくなり、設置箇所をカメラ6に変更した。2018年6月のビワの結実期に果実の食跡が発見されたため、カメラ4を設置した。2019年2月、温室に隣接する草地にけもの道が確認されたため、カメラ3を設置した。オリエンテーションハウスの壁面に哺乳類によるものと思われる爪痕が確認されたため、2019年12月から2020年5月にかけてカメラ8を設置した。2020年5月、照葉樹林の中のけもの道の存在に気がつき、カメラ10を設置した。同年7月に舟田橋のたもとで中型哺乳類の目撃情報があったことよりカメラ1を設置し、カメラ6でアナグマが撮影されたことを受けて8月よりカメラ7を設置した。2021年12月には、地面の近くに大きな洞のある樹木を発見し、カメラ2を設置した。2022年2月に、ススキ草地の積雪上でウサギ類のような足跡が発見されたことを受け、カメラ9を設置した。上記のカメラ設置年月のうち、生態園の管理やカメラのメンテナンスの都合上、一部の期間のみ実際にカメラを設置した。撮影モードは動画、撮影時間は10秒、インターバルは5秒に設定した。

自動撮影カメラの情報以外にも、中央博物館職員による生体の目撃情報、足跡や糞などのフィールドサイン、死体の取得情報も収集した。

これら2015年12月から2022年3月までの自動撮影カメラの情報及び2015年4月から2023年12月までの目撃情報や死体取得情報から、近年生態園を利用していることが確認された哺乳類についてまとめるとともに、今関ほか(1994)と比較し、約35年間で哺乳類相の変化について明らかにした。ただし、小型哺乳類を対象とした捕獲による生息状況調査は実施していないため、2015年以降に生息が確認できなかった種について、「生息していない」と断定することはできない。

### 結果と考察

2015年以降、確実に生態園を利用していることが確認された哺乳類は4目8科8種であった(図2)。今関ほか(1994)で報告された5目6科7種のうち3目3科3種は確実な生息情報が得られず、1目4科4種が新たに確認された(表2)。

#### (1) アズマモグラ *Mogera imaizumii*

毎年5月から6月頃に生態園で死体が見つかる(図2)。また、モグラ塚も頻繁に目撃されており、日常的に生態園内を利用している種と考えられる。今関ほか(1994)においても、青葉の森公園全域で本種の坑道や塚が確認されており、死体も発見されている。35年前から、継続的に生態園に生息していると考えられる。

#### (2) アブラコウモリ *Pipistrellus abramus*

毎年の春から晩秋にかけて、日没の約20分前から生態園周辺で飛翔している姿が目撃されている。2020年4月

には日中の時間帯に野鳥観察舎の周辺で飛翔する個体も確認されており(図2)、2021年4月には生態園内で死体が発見されている(図2)。今関ほか(1994)においても生息が報告されており、生態園周辺を利用していると考えられる。

2015年夏季にバットディテクターを用い、昼間の本種の生息状況を確認した。その結果、園内及び中央博物館の建物内において本種がねぐらとして利用しそうな隙間からは音声聞き取れず、本種は確認できなかった。そのため、本種は夕方以降に周辺地域から生態園やその周辺へと飛来し、舟田池で発生する小型昆虫類等を捕食する餌場として生態園を利用していると推測される。

#### (3) タヌキ *Nyctereutes procyonoides*

今関ほか(1994)で確認され、金城ほか(2000)による行動圏の調査により、一年を通して青葉の森公園を利用していることが報告されている。2015年以前からも、毎年、北側斜面や管理棟周辺、舟田池周辺、照葉樹林など生態園各所で、夜間だけでなく昼間の目撃情報が中央博物館職員により多数寄せられている(図2)。園内で死体も回収されている(図2)。

今回の自動撮影カメラの調査において、夜間に最も多く撮影された種の1つである。カメラ8,9を除く全てのカメラで撮影されており、生態園全域を利用していると考えられる。2015年以降も2~3頭が同時に自動撮影カメラで撮影され(図2)、毎年夏頃には成獣が幼獣を連れてくる様子が目撃されていることより、生態園または近隣の地域で繁殖し、定着し続けていると考えられる。

疥癬症を患って体毛の抜けた個体は、2015年~2019年頃までは園内で頻繁に目撃されていたが、2020年以降は目撃されていない。

#### (4) ニホンイタチ *Mustela itatsi*

今関ほか(1994)では、舟田池周辺での目撃情報が報告されている。2015年以降、自動撮影カメラでは撮影されず、フィールドサイン、死体も発見されていないため、本稿では生息状況が不明な種として扱う。2023年12月、中央博物館職員より、園路(図1のカメラ7付近)を横切り防火帯方面へ走り去ったという目撃情報が寄せられた。そのため、本種は現在も園内に生息している可能性があるが情報が少ないため、自動撮影カメラの設置場所の工夫等により、今後の詳細な生息状況の解明が待たれる。

#### (5) アナグマ *Meles anakuma*

2020年に初めて自動撮影カメラで撮影され、生態園を利用していることが確認された(宮川・下稲葉, 2022)。2021年から2022年は生態園内での確実な生息記録は得られなかったが、2023年3月以降再び姿が確認されるようになった。2020年は夜間に活動している様子が自動撮影カメラにより記録され、日中の目撃情報はなかったが、2023年は日中にも姿が目撃されるようになった。2020

	自動撮影カメラ	目撃情報	死体	フィールドサイン
アズマモグラ				
アブラコウモリ				
タヌキ				
アナグマ		 ©高橋直樹		
ハクビシン				
イエネコ				
アライグマ		 ©手島延清		
ネズミ類				
ウサギ類				

図2. 2015年から2023年にかけて生態園で確認された哺乳類。

年は自動撮影カメラ1, 6, 7, 10で撮影されており、2023年はカメラ1に近い北側斜面やあずまや付近で目撃されており、生態園全域で確認された。本種は千葉県レッドリスト2019年改訂版(千葉県, 2019)のC(要保護生物)ランクに選定された絶滅危惧種であり、千葉県レッドリスト(自然環境研究センター(編), 2004)では1984年を最後に絶滅とされていたが、近年は市内でも記録されている(eg. 宮川・下稲葉, 2022)。今後、本種が生態園を餌場として季節を限定して利用するだけなのか、休息や繁殖の場所として利用し定着するのか、観察を続けていく必要がある。

#### (6) ハクビシン *Paguma larvata*

落合・浅田(2002)によると、2001年に、生態園まで直線距離で1kmも離れていない千葉市中央区亥鼻(千葉大学医学部附属病院の構内)で死体が確認されており、生態園で本種が確認される可能性が高いと指摘している。これより、2000年代には生態園に侵入していた可能性が高いが、正式な記録はなかった。自動撮影カメラで最初に撮影されたのは2016年1月である。果実や種子が混ざった特徴的な糞はよく見つかり、日中の目撃情報も少なくない。生態園だけでなく、中央博物館本館周辺でも目撃情報が頻繁に寄せられる。生態園のビワの果実を食べる姿も確認されており、生態園内を採餌場所として利用していると推測される。自動撮影カメラ1, 6, 7, 10で日常的に撮影されており、生態園全域及び本館周辺を利用していると考えられる。目撃情報も自動撮影カメラでも基本的に単独で確認されるが、一度だけ成獣が幼獣を連れている様子が撮影された。そのため、少なくとも生態園の近隣で繁殖し定着していると考えられる。

#### (7) アライグマ *Procyon lotor*

2015年8月、舟田池の水位低下時に、舟田橋の直下の泥地に足跡が確認されたのが、生態園における最初の正式な記録である。この足跡の確認を受け、生態系に大きな影響を与える本種の生息状況を確認するために、自動撮影カメラによる調査を開始したが、著者らによる生態園における哺乳類相調査の発端となった。

日中に目撃されることはほとんどないが、一度だけ日中に舟田池を泳ぐ姿が撮影された(図2)。2015年12月に初めてカメラ5により1個体が舟田池ほとりで水中を手で探り餌を探す様子が記録され、2015年12月から2016年4月にかけてカメラが稼働した40日間で2回のみ撮影された。2019年1月には成獣2個体が互いを気にしつつも距離をとって共存する様子がカメラ6にて撮影された。2020年には成獣が複数頭の幼獣を連れている様子が複数のカメラで撮影された(図2)。カメラ9を除く全てのカメラで撮影されたため、園内全域を利用していると考えられるが、園内では糞は発見されておらず、本種は生態園を採餌のために利用していると考えられる。

千葉市における本種の捕獲数は2012年度には2個体だったのに対し、生態園で調査を開始した2015年度で

は22個体、2019年度には68個体と急速に増加している(千葉県, 2021)。生態園において本種は、侵入初期と思われる2015年頃には単独か少数の個体が低頻度で餌場として利用し、その後、近隣で定着した2020年以降には複数個体が高頻度で利用するようになったと推測される。千葉市における捕獲数の経年変化と、生態園での撮影された個体が単独から複数個体を経て親子連れになった変化の時期はよく一致する。これらの背景には、千葉市内におけるアライグマの急激な個体数増加が反映されていると推測され、生態園を利用するアライグマの数も2015年から2020年にかけて急速に増加した可能性が示唆される。

舟田池の管理により水位が低下した際には、本種が捕食したと推定されるアメリカザリガニ *Procambarus clarkii* の死体が池の周辺で頻繁に観察された。このような餌資源がアライグマを誘引している可能性がある。本種は在来種の捕食(例えば、インガメ(小賀野ほか, 2015))が報告されており、園内の在来種への影響が懸念される。そのため、今後も生息状況を観察し、千葉市の箱ワナ貸出制度を活用して2020年より実施している園内での捕獲を継続していく必要がある。

#### (8) イエネコ *Felis catus*

今関ほか(1994)では報告はないが、中央博物館職員によると当時から目撃されていたという。2015年の調査以降は、生態園を利用しているイエネコは多く、カメラ2, 9を除くほぼすべての自動撮影カメラで撮影されている。夜間にオリエンテーションハウスの壁面で爪とぎをしている様子やヘビ類の一種と格闘している様子、舟田池のほとりでカモ類を狙う様子などが撮影されたほか、昼間に海岸植生区域で砂浴びをするようなしぐさが目撃されており、昼夜問わず生態園ほぼ全域を利用していることが明らかとなった。生体の模様の違いから少なくとも10個体は生態園で記録されている。生態園内でムクドリ *Sturnus cineraceus* やキジバト *Streptopelia orientalis* を襲った事例が確認されており、在来種への影響が懸念される。

#### (9) ドブネズミ *Rattus norvegicus*

今関ほか(1994)で生息が確認されている。2019年に中央博物館の正面玄関にてドブネズミの死体が拾得された(図2)。本種は生態園周辺にも継続的に生息していると考えられる。

#### (10) アカネズミ *Apodemus speciosus*

今関ほか(1994)で、生息が確認され、その後も1998年までに生態園で標本が採集されている。しかし、本調査を開始した2015年以降、確実に本種と断定できる死体の拾得や、確実な目撃情報はないため、生息状況は不明である。2021年12月、カメラ2でドングリをくわえて木の洞に運ぶアカネズミに類似する小型のネズミ類が撮影されたが、画像が不鮮明で種が断定できなかった

表2. 今関ほか (1994) と 2015 年から 2023 年にかけて生態園で確認された哺乳類.

		千葉県立中央博物館 (2020), 宮川・下稲葉 (2022) と本報告										
		今関ほか (1994)		2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023
		1988～1992										
無盲腸目	モグラ科	アズマモグラ	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
翼手目	ヒナコウモリ科	アブラコウモリ	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
食肉目	イヌ科	タヌキ	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	イタチ科	ニホンイタチ	+									? <sup>**1</sup>
		アナグマ							+			+
	ジャコウネコ科	ハクビシン		+	+	+	+	+	+	+	+	+
	ネコ科	イエネコ	? <sup>**1</sup>	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	アライグマ科	アライグマ		+	+	+	+	+	+	+	+	+
齧歯目	ネズミ科	カヤネズミ	? <sup>**2</sup>									
		アカネズミ	+									? <sup>**3</sup>
		ドブネズミ	+					+				
兔目	ウサギ科	ニホンノウサギ	+									? <sup>**3</sup>
		5目6科7種		4目8科8種								

※1 日撃情報あり (私信) ※2 1988 年以前に記録あり ※3 画像, 足跡から種を断定できず

た(図2)。この画像はアカネズミの可能性があり、これまでの生息状況を考慮すると、本種は生態園にまだ生息している可能性が高いと思われる。

#### (11) カヤネズミ *Micromys minutus*

今関ほか(1994)は、かつては青葉の森公園内に本種が生息していた記録があるが、1988年から1992年の調査では生息の手がかりは得られなかったと報告しており、本種の生息の可能性は低いと考察している。生態園内において、本種に特徴的な球状の巣の発見報告は、少なくとも2015年以降はない。また、生息環境となりうるススキ草地に生育しているススキの数も多くない。そのため、本種が生息していないと断言することはできないが、2023年においても生息の可能性は低いと考えられる。

#### (12) ニホンノウサギ *Lepus brachyurus*

2015年以降、確実な生息情報はない。今関ほか(1994)は生態園及び本館周辺で本種の目撃情報があることを報告しているが、情報は少なく、本種は青葉の森公園東側の草地等が生息拠点であると考察している。1997年に生態園で拾得した本種の標本が中央博物館に収蔵されている。2015年以降は、生態園内での目撃情報、フィールドサイン、死体の拾得はなかったが、2022年1月及び2月の降雪翌日に、ススキ草地においてウサギ類の足跡のようなものが発見された(図2)。これをうけて、カメラ9を設置したが、哺乳類は撮影されず、足跡の正体は不明のままである。今後、更なる調査を行っていく必要がある。

#### (13) 補足：ニホンジネズミ *Crocidura dsinezumi*

今関ほか(1994)では、報告されていない。これまで本種の生態園での記録はないが、2020年11月に青葉の森公園内で拾得された死体が県自然保護課生物多様性センター職員により中央博物館に持ち込まれた。今後、園内でも確認される可能性がある。

### ま と め

2015年から2023年までの調査の結果、4目8科8種の哺乳類が園内に存在することが確認された。今関ほか(1994)で報告された5目6科7種のうち3目3科3種(ニホンイタチ、アカネズミ、ニホンノウサギ)は確実な生息情報が得られなかった。ニホンイタチ、アカネズミは生息の可能性が高いものの、種が確実に同定できる撮影記録や死体の拾得がなかった。今後、設置場所等を工夫した自動撮影カメラの調査や、トラップ等を用いた小型哺乳類の捕獲調査による確認が必要である。ニホンノウサギは、森林だけでなく草地も利用する傾向がある。そのため、草地での調査が不足している可能性とともに、草地を利用する動物の生息状況が周辺地域も含めた環境変化等により減少している可能性も考えられる。なお、アカネズミ、ニホンノウサギは近年報告されたイエネコに捕食されると考えられるが、イエネコは1990年前後

には生態園にすでに存在したとの情報もあるため、今回確実な生息情報が得られなかったこととの因果関係は不明である。一方、近年新しく報告された1目4科4種(アライグマ、アナグマ、ハクビシン、イエネコ)は、全て食肉目の中型哺乳類で、アナグマ以外は外来種である。イエネコ以外の3種は、先行研究により千葉県内での分布拡大傾向が示されている[例えばアライグマ(落合ほか, 2002), ハクビシン(落合・浅田, 2002), アナグマ(環境省自然環境局生物多様性センター, 2022)]。県内広域でみた分布域の変化の影響が都市公園内の生態園においても及ぶようになり、35年前には生息しなかったこれらの種が見られるようになった可能性がある。また、今後の小型哺乳類の捕獲調査等の実施により、ニホンジネズミが見つかる可能性が示唆される。

### 謝 辞

本報告の作成にあたり、千葉県立中央博物館職員の山本伸子氏に2015年から2016年にかけて自動撮影カメラの設置にご協力いただいた。千葉県立中央博物館職員の高橋直樹氏、同ボランティアの手島延清氏には、中型哺乳類の貴重な生態写真、同職員の尾崎煙雄氏からはニホンイタチに関する情報、千葉県環境生活部自然保護課生物多様性センターの大島健夫氏からは千葉県立青葉の森公園のジネズミ標本を提供いただいた。千葉県立中央博物館生態・環境研究部をはじめとした職員の皆様、生態園の植生管理や巡回警備にあたる職員の皆様からは、哺乳類の目撃情報等の提供にご協力いただいた。以上の方々に感謝申し上げます。

なお本報告は千葉県立中央博物館地域課題研究「房総の哺乳類誌」及び「生態園の生態系変遷に関する研究」の一環として実施した調査に基づくものである。

### 引用文献

- 千葉県. 2019. 千葉県の保護上重要な野生生物—千葉県レッドリスト—動物編2019年改訂版. 42pp. 千葉県環境生活部自然保護課, 千葉市.
- 千葉県. 2021. 第2次千葉県アライグマ防除実施計画. 26pp. 千葉県環境生活部自然保護課, 千葉市.
- 千葉県立中央博物館. 2020. 生態園の外来哺乳類. <https://www.chiba-muse.or.jp/NATURAL/special/alienmammals-of-ecologypark/index.htm> (最終閲覧日: 2024年1月22日)
- 今関真由美・山口剛・落合啓二. 1994. 生態園及び周辺地域における哺乳類の生息状況. 千葉県立中央博物館自然誌研究報告特別号(I): 205-214.
- 金城芳典・落合啓二・浅田正彦・松本宗之. 2000. 千葉市の都市公園におけるタヌキの生息地利用. 千葉県立中央博物館研究報告6(1): 77-86.
- 環境省自然環境局生物多様性センター. 2022. 令和3年度(2021年度)中大型哺乳類分布調査調査報告タヌキ・キツネ・アナグマ. 139pp. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田市.
- 宮川尚子・下稲葉さやか. 2022. 千葉県立中央博物館敷地内(千葉市中央区)におけるニホンアナグマ *Meles anakuma* の出現記録. 千葉県立中央博物館研究報告16(1): 69-72.
- 落合啓二・石井睦弘・布留川毅. 2002. 千葉県におけるアライ

- グマの移入・定着. 千葉県立中央博自然研究報告 7(1): 21-27.
- 落合啓二・浅田正彦. 2002. ハクビシンの千葉市への侵入. 千葉中央博自然研究報告 7(1): 17-19.
- 小賀野大一・吉野英雄・八木幸市・田中一行・笠原孝夫. 2015. 房総半島のため池に生息するニホンイシガメの危機的状況. 爬虫両棲類学会報 2: 1-8.
- 自然環境研究センター (編). 2004. 千葉市の保護上重要な野生生物—千葉市レッドリスト—. 105pp. 千葉市環境局環境保全部環境保全推進課, 千葉市.
- 由良浩. 2019. 生態園の30年. 所収 千葉県立中央博物館 (編) 千葉県立中央博物館開館30周年記念誌 pp. 20-21. 千葉県立中央博物館, 千葉.

## **Changes in Mammalian Fauna of the Ecology Park: A Three-Decade Analysis (1988-2023)**

Sayaka Shimoinaba<sup>1)</sup> and Naoko Miyakawa<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> Natural History and Institute, Chiba  
Aoba-cho 955-2, Chuou-ku, Chiba 2608682, Japan  
E-mail: shmnb@chiba-muse.or.jp

<sup>2)</sup> Cultural Promotion Division, Environmental and  
Community Affairs Department, Chiba Prefectural  
Government

1-1 Ichiba-cho, Chuo-ku, Chiba 260-8667, Japan  
E-mail: n\_miyakawa@chiba-muse.or.jp

The initial study of the Mammalian fauna at the Ecology Park of the Natural History Museum and Institute, Chiba, identified seven species (from five orders and six families) around 1990. In recent years, sightings of the Japanese badger, raccoon, palm civet and domestic cat have been reported; however, the current comprehensive Mammalian Fauna remains unknown. We conducted research on the mammal species inhabiting the Ecology Park through direct observation, analysis of field signs, and a camera trapping survey carried out from 2015 to 2022. As a result, eight species (from four orders and eight families), including four newly confirmed species (from one order and four families), were identified. Compared to the study around 1990, the existence of three species (from three orders and three families) is uncertain.

Key words: Ecology Park, Mammalian Fauna.